成願寺

季報

127

令和3年2月18日
(2021年)

目次

「前向きに生きる『遺言』のちから」竹村信彦……1
「羅漢さまの功徳②」大谷哲夫……6
中野たから幼稚園「避難訓練」の報告……10
中野たから幼稚園「たからスポーツデー」の報告……10
山内短信……12

発行　多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作　地人館

令和二年 年末の会 リモート説教

前向きに生きる「遺言」のちから

長野県 長福寺 住職　竹村信彦

長野県 長福寺 住職　竹村信彦師

みなさん、こんにちは。いま私は、住職を勤めております長野県北安曇郡池田町のお寺よりお話をさせていただいております。こうしてインターネットを利用して画面越しでのお話というのは、成願寺様も初めてではないかと思いますが、私も初めての経験でございます。何とか最後までお話できればと思っております。

最初に少し自己紹介をさせていただきますと、私は長野県南部に位置する松川町でりんご農家を営んでおります家の出身でございます。身内との死別や僧侶への憧れなどがございまして、高校生の頃、自分も修行をして人間を鍛えたいと考えました。ご縁があり、福井県の大本山永平寺様で修行をさせていただいて、こうして僧侶となることができました。その後、現在のお寺の住職になるまでは、中央線の

春彼岸中日法要「修証義奉読会」のお知らせ

三月二十日（土）春分の日

十一時　受付始まり

十二時　講談・日向ひまわり師

十三時　法要

法要前に恒例の日向ひまわり師による講談をお楽しみいただきます。

三鷹駅の近くに住みまして、布教に関する勉強をしておりました。長野のお寺は田舎でございまして、コンビニまで行くのに歩いたら三十分はかかります。なんでも揃っていた三鷹が懐かしいな、などと思いながら住職になって四年が経とうとしております。

お礼と誓願

僧侶となりまして、色々な方との出会いがあるわけですが、約一年前の正月、私どものお寺にお詣りに見えて熱心に手を合わせている方がいました。「お詣りありがとうございます」と声をかけましたら、その方は、「こちらこそありがとうございます」とおっしゃった。「なぜ、そう言ってくださるのですか」とお聞きしましたら、「昨年を無事に過ごすことができて、こうして新年にお詣りに来られたことが、私は嬉しくて仕方がないのです。仏様には、特にお正月のお詣りの時には感謝の気持ちをお伝えしているのです」。

おばあさまでらっしゃいましたが、にこにことお話をしてくださいました。

私は、なるほどな、と思いました。この方に出会うまで、みなさんがお寺にお詣りに来られるのは、お願い事をしに見えると思っていたのです。

ですがこの方から、仏様に、無事に過ごすことができた感謝の気持ちをお伝えするということを教わったのです。感謝の気持ちをお伝えした上で、引き続きどうかお見守りください。よろしくお願い申し上げます、と手を合わせる。こうしたことを学ばせていただいたわけです。

これはお寺にお詣りするときに意識をしていただきたいのですが「お礼と誓願」ということです。最初に心からの感謝をお伝えした上で、お誓いを立てて お願い事をする。たとえば健康を願うのであれば、自分自身の生活を見直して、暴飲暴食はやめて早寝早起きの規則正しい生活を心がけます、とまずはお誓いをたてる。ですからどうか健康な生活が送れるようにお見守りください、と手を合わせる。暴飲暴食はやめられないけど、どうか健康に過ごせますようにとお願いをしたら、それは都合の良い身勝手な注文です。

どうか皆様方はこの一年を無事に過ごすことができたお礼を観音様に申し上げ、来年はこうした精進努力をするからお見守りください、とお手を合わせていただければと思います。

自分の思いを言葉に遺す

本日は「前向きに生きる『遺言』の力」という演題でお話をさせていただきます。

今年もあと二週間ほどで終わりまして、新たな年、令和三年・二〇二一年を迎えるわけです。より良い新年、前向きな新年を迎えたいと誰もが思うわけでございますが、みなさまは新年をどのようにお迎えになられていますか。ご家族で過ごされるなら、互いにあいさつをして、今年の目標を言い合うですとか、仏壇に手を合わせて、仏様、ご先祖様に「お礼と誓願」を意識してお勤めされるのも良いですね。または書き初めをして、そこに目標となる言葉を書き記すなんてこともお正月らしくて良いのではないかと思います。

そういう私はどうしているかと申しますと、毎年元旦には遺言を書いております。遺言と申しましても、弁護士さんにお願いするような、遺産がどうしたとかそういうものではございません。私の書く遺言は言わば作文のようなものでして、自分の人生を振り返って、何を大切に生きてきたか、どういう生き方をしてきたか、そういう思いを新年に書き留めております。そうしますと、過ぎた一年でやり遂げたこと、またはやり遂げられなかったこと、反省点や改善点などがよくわかってきます。また、一日、一月、一年という時間を過ごせた事のありがたさに気がつくわけです。一日、一月、一年という時間の流れをどこか当たり前のように思ってしまいがちですが、私のように人と人が死別する場に立ち会わせていただきますと、人間の命はいつ終わりが来るかわからないと強く実感いたします。年齢も様々、原因も様々、私もいつどういう理由で旅立つ時がくるのか、この帰り道かもしれないし、明日かもしれない。そうしたことを意識をせざるを得ないわけです。

そこで私が大切にしているのが元旦の習慣、遺言を書くということです。一つは自分の生き方を改めて、意識をして見つめるということです。自分自身の事はもちろんですが、そばで支えてくれる家族や友人、お檀家のみなさんや坐禅会においでになるみなさん、仕事のこと、意識をして見つめてみますと、改めて当たり前ではないんだなということに気づかせてくれます。もう一つは生き様を遺すということです。みなさんにも、ご自身が大切にされている心情というものがおありかと思います。心情を書き遺

すということは、残された家族や近しい方への大切なメッセージになるのではないかと思うのです。みなさんが思っている以上のプレゼントになります。残された方にとって励ましになるんですね。

それでもなぜ新年早々遺言を書こうと思ったのか不思議に感じられる方も多いかもしれませんが、実はもともと私たち僧侶は遺偈（ゆいげ）という後世に自分の教えや思いを遺す偈文、つまり漢詩を毎年、年の始めに書いております。始まったばかりの一年、いつ旅立っても良いように遺偈に心情を書き遺すのです。

私の遺言はこの遺偈にヒントを得て、万が一があった時も自分の大切な人たちによりわかりやすく伝わることを願ってはじめたのです。また、この元旦の遺言によって、この一年をどう過ごそうか定まってまいります。どうぞみなさんも、ご自身の思いを書き留めますとそこに気づきがございます。お試しいただければと思うわけでございます。

言葉の持つ力

「開運なんでも鑑定団」というテレビ番組をご存じの方も多いと思いますが、鑑定士の一人に北原照久さんというおもちゃの専門家がいまして、こんな言葉をおっしゃっていました。「体は食べたものでつくられる。心は聞いた言葉でつくられる。未来は話した言葉でつくられる」。

私は特に「未来は話した言葉でつくられる」ということに感銘を受けました。たとえば、ありがたい、ありがたいと日々感謝の言葉を周りの人に伝えている方。一方、人の批判ばかりを言って過ごしている方。どちらがよろしいでしょうか。みなさんはいかがですか。「未来は話した言葉でつくられる」と思いますと、前者の方が良さそうですね。また、「心は聞いた言葉でつくられる」ということを考えましたら、ご自分でしたら、どちらの方の近くにいたいと思われますか。こうしたことを考えますと、先程おすすめしました遺言も、どういう言葉を書くかによって、未来や周りの方々へと影響が出てきそうですね。言葉の持つ力というものを感じるわけです。

言葉の持つ力を具体的にご紹介しますと、私ども長野の方では、お葬式の際に「お別れの言葉」の時間がございます。東京やそのほかの地域であるかわかりませんが、弔辞を読まれる方の前に亡くなられた方のご家族が故人に向けて手紙を読むのです。長野ではお孫さんが読まれることが多いのですが、あ

る日のご葬儀の際、中学生の女の子が「お別れの言葉」を読まれました。

「おばあちゃんともっと話がしたかった。おばあちゃんは家族のことをどう思っていたのかな。もっと話を聞けばよかった。もっと一緒に過ごせばよかった」とおっしゃっていました。でも、「一つ救いなのは、おばあちゃんがお手紙をくれたことです」。

このお手紙は、年賀状の代わりのようにお正月に届いたそうです。高校受験に向けて悩んでいた彼女に、「これからの人生がんばってね。いつも見守っているよ。がんばるあなたが私の誇りだよ」というような内容だったそうです。おばあさまからのお手紙が宝物になって、その「メッセージを胸に高校受験、これからの人生を頑張っていきます」という「お別れの言葉」でした。彼女にとってかけがえのない言葉のプレゼントになった。もっと話がしたかったという今は叶わない思いに対する救いになったのです。

またあるお葬式の際、亡くなったお父様がお世話になったというホスピス医の言葉を遺族の方から教えていただきました。

「すべての人間は教えを残して死んでゆきます。お父様との会話を教えだと思って大切にしてください」。余命宣告を受けて悲しみにくれる家族に向けた言葉だったそうです。そう言われるまでは、死にゆくお父様のところへ会いに行くのも辛くて避けるようにしていたそうです。でもホスピス医の先生からの言葉で考えを改め、なるべく会いに行き、残り少ない時間の中でお父様が何を話されるか一言、一言を大切に忘れないようにしよう、と思われた。亡くなるまでの間、宝物のような時間となったとお話ししてくださいました。

そのお話を伺いました時に思いましたのは、死にゆく者というのは全員がそうだということです。余命宣告を受けたから死にゆく者になったわけではないですね。みなさんも私も死にゆく者です。ですから日頃から大切に生きましょうということなのです。

もう一つ、ご紹介したいエピソードがございます。それは東日本大震災の際、ニュースを見ておりました時のことです。深い、深い悲しみ、苦しみの真っ只中、避難所に当時の天皇陛下、皇后陛下が慰問をされているニュースでした。美智子様が被災者の方の手を取って、ただ一言。「生きていてくださってありがとうございます」とおっしゃった。その言葉を聞いた時になんて勇気づけられるお言葉だろうと非

常に感動いたしました。その映像を見ていた私まで勇気をいただいた、そんなお言葉でした。

普段、私たちが何も思わずに便利に使っている言葉にはこんなにも力があった。誰かを勇気づけられるというのはすごいことです。

人間として僧侶として、色々な方に暖かい言葉を伝えていかなければならないと思い返すたびに決意を新たにしております。皆様もぜひそういうお気持ちで日々を過ごしていただければと思います。

本日はありがとうございました。　合掌

連載

羅漢さまの功徳②

新宿区長泰寺 住職・元駒澤大学 総長　大谷哲夫

『法住記』にみる羅漢の尊名・住地・活動領域

「十六羅漢」として、その尊名と住地と眷属（親族）、その活動とが文献上にはっきりと見られる最初は、中国唐代の永徽五年（六五四）に玄奘（西遊記で知られる三蔵法師〈六〇二～六六四〉）が訳した『法住記』、すなわち『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』（『大正蔵巻４９』）である。この『法住記』は釈尊が亡くなった後八百年、執師子国（セイロン）の勝軍王の都にあって大阿羅漢といわれた難提蜜多羅（中国名・慶友）が著した小本である。

それに基づいてその活動などを記したものに、やはり唐代の『法苑殊林』第三十住持篇などがあるが、唐代以後展開する羅漢についての伝承や考証などは『法住記』がその基本になるといって過言ではない。

『法住記』は、難提蜜多羅が、釈尊の説いた『法住記』を敷衍してさらに説くという形式をとっている。

はじめに、釈尊が涅槃に入らんとする時、十六人の大阿羅漢に、「この世にあって各地を巡って法を説き、人々をして幸福ならしめよ」と滅後の正法護持を委嘱したために、「十六阿羅漢は、その言に従い永久に涅槃に入らず、それぞれの任地で多くの眷属とともに現世に活動している」として、その尊名と眷属、そして活動の場所などを記している。その記述は極めて短いものであるが、後代に与えた影響は大きいので、ここで要点をまとめると次のようになる。

①釈尊が涅槃の時、現世に永く正法を護持させるために十六羅漢に正法を依嘱し、多くの施主に福田

をなさしめ大果報を得させる。
②十六羅漢の尊名・眷属とその住処を記す。
③国王・大臣・長者・居士が、仏法僧を供養すれば十六羅漢が施主に果報を与える。
④国王・大臣・長者・居士が、七宝などで仏像や塔を作り供養すれば、その善根力の故に弥勒如来第一会に生まれ涅槃を得る。
⑤全ての施主が涅槃経をはじめとする大乗経を読誦し供養すれば、弥勒如来の第二会中に生まれ涅槃を得る。
⑥全ての施主が仏法修行者を供養し給侍すれば、弥勒如来の第三会中に生まれ涅槃を得る。

そして、十六羅漢の尊名と眷属数と住処を次のように記している。

第一尊者　賓度盧跋羅惰闍
千の阿羅漢と西瞿陀尼州に住す。
第二尊者　迦諾迦伐蹉
五百の阿羅漢と迦湿弥羅国に住す。
第三尊者　迦諾迦跋釐惰闍
六百の阿羅漢と東勝身州に住す。
第四尊者　蘇頻陀
七百の阿羅漢と北倶盧州に住す。
第五尊者　諾矩羅
八百の阿羅漢と南瞻部州に住す。
第六尊者　跋陀羅
九百の阿羅漢と耽没羅州に住す。
第七尊者　迦理迦
千の阿羅漢と僧伽荼州に住す。
第八尊者　伐闍羅弗多羅
千の阿羅漢と鉢剌拏州に住す。
第九尊者　戍博迦
九百の阿羅漢と香酔山中に住す。
第十尊者　半託迦
千三百の阿羅漢と三十三天に住す。
第十一尊者　羅怙羅
千百の阿羅漢と畢利颰瞿洲に住す。
第十二尊者　那伽犀那
千二百の阿羅漢と半度波山に住す。
第十三尊者　因揭陀
千三百の阿羅漢と広脇山中に住す。
第十四尊者　伐那婆斯
千四百の阿羅漢と可住山中に住す。

第十五尊者　阿氏多

千五百の阿羅漢と鷲峰山中に住す。

第十六尊者　注茶半託迦

千六百の阿羅漢と持軸山中に住す。

この十六羅漢のうち、第一の賓度盧、第九の戍博迦、第十の半託迦、第十一の羅怙羅、第十六の注茶半託迦（周利般特）の五人は仏弟子として著名であるが、後の十一人の来歴は不明である。

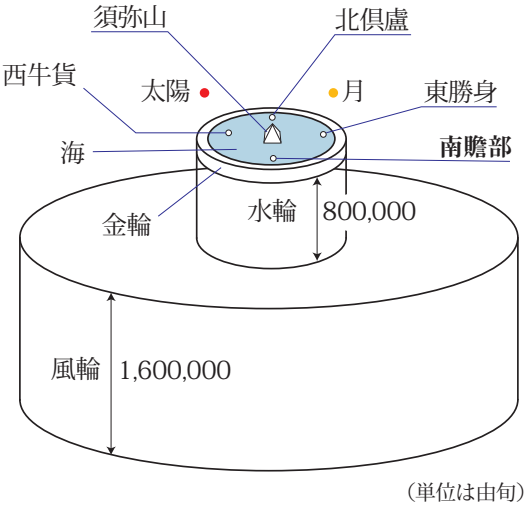
それでは、その十六羅漢たちの活動の場所とはどのようなところで、その活動とはどのようなことなのであろうか。

羅漢がその眷属とともに居住し活動する場所とは、『法住記』を著した難提蜜多羅（慶友）が勝手に架空の場所を想定したものではなく、仏教の宇宙観に基づく土地なのである。

仏教の宇宙観によれば、宇宙の中心には、風輪、水輪、金輪という広大無辺で重厚な地盤があり、その上に八万由旬（古代インドの距離の単位。一由旬は約七キロメートルとされる）の高さのある須弥山と名づく巨大な高山が聳え、その周りを九つの山と八つの海が取り巻き、その周りを大陽と月がめぐり、さらにその側面に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上という六道がある。

それにさらに須弥山の四方の外界に南贍部、東勝身、西牛貨（宮陀尼）、北倶盧の四大州があり、それぞれに衆生が存在し、その南贍部州というところが我々の住む処だとするのである。

また、第九尊者の住む処を香酔山とするが、それ



【仏教の宇宙観】
定方晟著「インド宇宙論大全」を参考に作成

は大雪山の北方の崑崙山とも言われる。

以上の住所は何れも須弥山思想によるものであるが、実際の地名と結びつくところもある。

第二尊者の迦湿弥羅国は、北西インドのカシュミールで、六朝時代の終わりまではガンダーラと呼ばれていた。第八尊者の鉢剌拏州はハラナ国、現在のベナレス。第十二尊者の半度波山はマガダ国の首都王舎城（ラージャグリハ）を取り巻く五山の一つパーンダハァ山。第十五尊者の鷲峰山は、釈尊説法の地である霊鷲山（グリドラ・クータ）。

では、その地において、羅漢たちは多くの眷属とともに一体何をしているのであろうか。このことについても『法住記』は彼らの活動を次のように記している。彼等十六羅漢は、仏典の経律論の三蔵はもちろん、広く仏教以外の典籍にも通じ、三界の汚濁には決して染まらず、皆が三明・六通すなわち智慧のはたらきによって愚闇を破る六種類の神通力、

天眼通（人々の転生の状態を知るなどあらゆるものを見通す能力）

天耳通（あらゆる音を聞く能力）

他心通（他人の心を知る能力）

宿命通（過去世の生存の状態を思い出す能力）

漏尽通（自分の煩悩が尽きたことを知る能力）

八解脱（八種の定力によって欲貪・色貪等を除去する能力）

これら無量の功徳を具備し、釈尊の委嘱によるがゆえに神通力によって自分の寿命を延ばし、釈尊の正法を常に護持することになった。

もし、この世界の、国王・大臣・長者・居士、さらには一切の人々が清浄心を起こし、四方僧のために大施の法会を設けたり、寺院の慶事法会などの場合は、十六羅漢とその眷属たちは随時、分に従って種々な形となって阿羅漢としての聖儀を隠してその場に赴き、凡僧や俗人となってそこに列し、密かに供養を受け、その施主に対して立派な果報を得させるようにする、と。

おそらくは、仏教の伝来とともに中国に流伝した羅漢の存在は、この『法住記』の「十六羅漢は、釈尊に依嘱され、涅槃に入らず、永遠に正法を護持し、あらゆる功徳を一切の人々に与える」という記載が事実として信奉され、中国の羅漢思想へそして羅漢道へ羅漢信仰へと展開していくのである。（以下次号）

＊この稿は「十六羅漢の様相」（大谷哲夫編著）を成願寺季報向けに加筆・再編したものです。

中野たから幼稚園「避難訓練」の報告

去る十一月十六日（月）、今月は職員室からの出火を想定して避難訓練が行われました。年少組は先生から避難の仕方や「おかしもち」のお話を聞いて備えます。「おかしもち」とは、「おさない」「かけない」「しゃべらない」「もどらない」「ちかよらない」の頭文字で避難する際の約束事です。年中・年長組は自由遊びをしながら、いつ起こるかわからない「火災」に備えます。火災の発生が知らされると子どもたちはハンカチで口を覆い、速やかに園庭へ。即座に人数確認がされると安全なお寺まで避難しました。

2階からも素早い避難用すべり台で避難

煙を吸わないように口元を抑えて上履きのまま園庭へ

「おかしもち」を守りながら、学年ごとに手を繋いでお寺へ避難

中野たから幼稚園「たからスポーツデー」の報告

秋の一大イベント、運動会。今年は「たからスポーツデー」として、十月九日（金）年少組、十四日（水）年中組、二十二日（木）年長組と学年ごとに行われました。年長組が行う競技への憧れを促すため、年長組のお兄さん、お姉さんは他の学年のスポーツデーのオープニングに参加。「はじめのことば」と「ソーラン節」を披露して、スポーツデーを盛り上げてくれました。また、年中組、年長組の応援には他学年の園児も参加して声援を送り合いました。

年少組ははじめてご父母の前で、かけっこと踊りに取り組んでかわいい姿を見せてくれました。年中

かけっこ（年少組）

手作りのお面もかわいい「やんちゃかいじゅう」（年少組）

組はクラスごとに心を一つにしてパラバルーンに挑戦。カラフルなバルーンが大きく膨らんだり、回転したりと見応えがありました。年長組はソーラン節の集大成。気合いの入った踊りは圧巻でした。息のあった組体操、そして全員が参加して行ったリレーは白熱して、ご父母も先生方も子どもたちも応援に力が入りました。

　最後に園長先生からがんばったみんなに金メダルのご褒美が渡されて、嬉しそうな子どもたちでした。

　以下にご父母からの感想を抜粋して紹介します。

＊先生のお話を聞いてきちんと整列をしたり、かけっこでお名前を呼ばれたらお返事をしたりと成長を感じたスポーツデーでした。＊とても可愛く微笑ましかっただけでなく、年長組の力強いソーラン節を見られたことは親にとっても貴重な機会でした。＊パラバルーンでは何もできなかった息子がお友達と協力して一つのことを成し遂げていると思い感動で涙が出ました。＊感染予防を図りながら園児をあそこまで指導するのは並大抵の御苦労ではなかったと思います。先生方の温かい御指導があったからです。子ども達に自信と勇気と頑張る力を身に付けてくださり本当にありがとうございました。

かけっこ（年中組）

心を一つに「パラバルーン」（年中組）

ソーラン節（年長組）

白熱のリレー（年長組）

山内短信

◎大本山總持寺監院　乙川暎元老師 御来山

旧臘十三日　副監院勝田浩之老師同行での御来訪。貫首江川辰三禅師のお言葉とご揮毫を拝受しました。

大本山行事協賛への謝礼との由。しばしの茶席で、御尊父乙川瑾映禅師あれこれ、先十月行われた山口県萩市海潮寺で大導師江川辰三禅師猊下が、御開山不見明見禅師六百年大遠忌を、白槌師乙川監院老師が、新住木村延崇師晋山結制を御慶讃された様子を伺いました。

（貢人私記）乙川瑾映禅師と私の父義堯和尚は誼あり、私も伺った最乗寺御晋山の頃は忘れられません。また延崇和尚御家族とは五十年超える交流、この御盛儀はまこと嬉しいニュースでした。

◎除夜の鐘の報告

昨年の除夜の鐘は完全予約制にて、例年よりも時間を早めて執り行いました。

門前にて二十二時より受付。消毒とマスク着用をお願いして参加記念のおみやげを渡します。二十二時半より門の下で読経。その後、住職による第一打が撞かれると、大晦日の中野坂上に年越しを告げる鐘の音が響きました。

来会者が参列して読経

鐘を撞く親子。綱は一撞きごとに消毒を実施

古札のお焚き上げ

＊ご来山の際は体調を考慮の上、マスク着用、手洗い、咳エチケットなどにご協力いただき、感染症対策にお努めくださいますようお願い申し上げます。

＊ご案内の行事は状況によっては変更または中止になる場合がございます。当山ホームページにてご確認いただくか、寺務所までお問い合わせください。